これからの社会を生きる子供たちにつけたい力と道徳教育の関連
―教員志望学生アンケート調査結果より―

谷　山　優　子

はじめに

新学習指導要領（文部科学省 2017）では、2030 年の社会の在り方を想定し、どのような力を子供たちにつける必要があるかという視点で改訂がなされた[(1)]。この改訂では、道徳が教科化され「特別の教科 道徳」となった。これは、いじめ対策の第一の方針として道徳教育を充実するということに重点がおかれたからである。「特別の教科 道徳」の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多角的・多面的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことである[(2)]。いじめをはじめとする児童生徒の問題行動の背景に行動のコントロールが苦手といった要因が挙げられる[(3)]のであるが、一人一人の子供たちが自身の価値を認識し、相手の価値を尊重し、多様な人々と協働しながらよりよい人生とよりよい社会を築くというこれからの教育のあり方を示すことで解決を図っていこうというのである。中央教育審議会（平成 24 年 8 月 28 日）の「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」[(4)]の中では、これからの社会と学校、教員に期待される役割が挙げられている。これらのことから、学校や教員は、基礎的・基本的な知識・技能の習得、これらを活用し課題を解決する思考力・判断力・表現力、多様な人間関係を結ぶ力を子供たちに育むことが求められていることがわかる。このような社会からの教員への期待に対して、教員志望学生はどのような力を子供につけたいと考えているのだろうか。

1．研究の目的

本研究は、これからの社会で生きる子供たちに対して教員志望学生がどのような課題に取り組ませたいと考えているのか、またその取り組みでどのような力を子供たちにつけたいと考えているのかを明らかにすることを目的としている。そのために、教員志望学生にアンケート調査を行い、結果を分析する。その結果から、これからの社会を生きる力と道徳教育との関連について考察する。

2．研究の方法

(1) 調査対象者

小中高校教員志望の 2 回生（125 名）、3 回生（33 名）の合計 158 名の女子学生

（2017 年 7 月と 2018 年 1 月に実施）

(2) 調査方法

調査では、2 つの問いについて回答を求めた。それぞれ以下のとおりである。

1つ目は、「あなたは、これからの社会を生きる子供たちにどのような課題に取り組ませたいですか。」という問いに対し12の選択肢から3つ以内に〇をつけて回答するものとした。選択した項目について取り組ませたい課題が具体的に自由記述できる枠も設ける。項目に選択したいものがなければ「その他」を選択するものとする。

選択肢は以下のように設定した。(【　】は道徳教育の内容項目 A～D [5] から主なものを筆者が対応させてみた)

1. キャリア教育（なぜ働くのか　など）【C】
2. スポーツ、武道の精神（自分を高める　など）【A】
3. ものづくり（信頼される製品　など）【A】
4. 奉仕の精神（ボランティア、社会参加　など）【C】
5. 多様性を認める社会（LGBT、マイノリティ　など）【C】
6. 国際理解教育（他の国の文化、宗教　など）【C】
7. 情報化社会（ネット、AI、IoT、Youtuber　など）【B】
8. エネルギー教育（省エネ、原子力発電　など）【C】
9. 弱者（障害者や子供、高齢者）の住みよい社会づくり【C】
10. 郷土の文化、生活（地元を誇りに思う心　など）【C】
11. 環境教育（水、動植物など）【D】
12. 命を大切にする【D】
13. その他

2つ目は、「あなたは、これからの社会を生きる子供たちにどのような力をつけたいと考えていますか。」という問いに対して自由記述で回答するものとした。

3．結果と考察

12の選択肢とその他を設けたが、その他を選んだ学生は0であったので、12の選択肢はおおむね学生の回答したいカテゴリーを満たしていたと考える。回答で多かった順にまとめたものを示しておく。（表1）

1番多かったのは、「命を大切にする（66.5%）」であった。取り組みたいテーマとしては、「いじめ」、「震災・災害」、「自殺」、「生い立ちの聞き取り」、「世界の死亡率」、「動物愛護」、「動物を育てる」、「命の大切さ」などが挙がっていた。

2番目が、「弱者（障害者や子供、高齢者）の住みよい社会づくり(35.4%)」であるが1番との差は大きい。取り組みたいテーマは、「障害者体験」、「障害者への接し方・支援」、「車いす・点字・白杖」、「ユニバーサルデザイン」、「バリアフリー」などが多く挙がっていた。

表１　教員志望学生の回答（N=158）

	質問項目	道徳関連項目	回答数と比率
1	命を大切にする	D	105（66.5%）
2	弱者（障害者や子供、高齢者）の住みよい社会づくり	C	56（35.4%）
3	国際理解教育（他の国の文化、宗教　など）	C	38（24.1%）
4	スポーツ、武道の精神（自分を高める　など）	A	37（23.4%）
5	郷土の文化、生活（地元を誇りに思う心　など）	C	36（22.8%）
6	奉仕の精神（ボランティア、社会参加　など）	C	34（21.5%）
7	情報化社会（ネット、AI、IoT、Youtuber　など）	B	33（20.9%）
8	環境教育（水、動植物　など）	D	30（19.0%）
9	多様性を認める社会（LGBT、マイノリティ　など）	C	26（16.5%）
10	キャリア教育（なぜ働くのか　など）	C	21（13.3%）
11	ものづくり（信頼される製品　など）	A	11（ 7.0%）
12	エネルギー教育（省エネ、原子力発電　など）	C	8（ 5.1%）
13	その他	―	0（00.0%）

３番目は、「国際理解教育（24.1%）」で、「他国の文化体験」、「差別」、「観光客にインタビュー」、「留学・海外旅行」、「外国の人と交流」、「宗教の考え方の違い」などが取り組みたいテーマとして多く挙がっていた。１位の「命を大切にする」は158人中105人（66.5%）が選んでおり、３分の２の学生が命を大切にするという課題について様々なアプローチで取り組ませたいと考えている。２位の「弱者（障害者や子供、高齢者）の住みよい社会づくり」は35.4%の回答を得たので、３人に１人が選んでいる。３位の「国際理解教育＜他国の文化、宗教　など＞」から７位の「情報化社会（ネット、AI、IoT、Youtuber）」までは僅差で、おおむね４人に１人が選んでいる。10位となった「キャリア教育」が意外と低い。学生は、「なぜ働くか」が生き方につながることがピンときていないのだろうか。　エネルギー教育については、意外と低く最下位であった。ここに挙げたこと以外の課題を選択する「その他」は回答がゼロであった。

教員は、これからの社会が自分たちの経験していない社会になることを強く意識し、子供たちに生きる力をつけたいと考えているが[(6)]、学生は、自分たちが経験した体験的な学習の記憶の影響があるのか、取り組みたい課題は、「総合的な学習の時間」などで実践されてきたテーマを挙げている傾向があると推測する。

非常に多く選択された命を大切にする心（【D】）については、最近のいじめによる自殺の報道に強く心を痛め、重く受け止めていることが影響しているのではないかと考える。

４．まとめと今後の課題

本研究で、学校現場にこれから出ていく学生が、これからの社会を生きる子供たちに、命を大切にし、働くことの意義を見つめさせ、誰もが住みよい社会を人と関わりながら作っていく力をつけさせたいと考えており、それらは道徳教育の内容項目とも一致することがわかった。

今後、学校は道徳教育を中心にしながら、関連する教育活動に取り組んでいくのであるが、教員が意識していない課題であっても、子供が必要であると感じている課題もあるだろう。個々の子供が課題を探究できる総合的な学習の時間を活用するという視点は重要であると考える。

押谷（1995）は、子供の日常生活をしっかり見つめながら長期的に人間としての在り方や生き方の展望を持ち、子供自身が主体的に道徳学習を展開していくような道徳教育、いわゆる「総合単元的学習」を提唱している[(7)]。「特別の教科　道徳」の道徳的価値の学習を中心に据え、各教科や特別活動、学校での日常生活、家庭や地域での学習なども広義の道徳教育と位置づけ、よりよい人間形成を目指す指導を充実させていくというものである。道徳教育をしたから、子供に生きる力がつくというものではない。目の前の子供がこの先もずっと自分から進んで主体的によりよく生きようとする力をどのように学ばせるかをきっちりおさえて道徳教育に取り組むことがこれまで以上に求められている。

＜註＞

(1) 新学習指導要領（平成 29 年 3 月）については、文部科学省ホームページより詳細がわかる。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2017/06/16/1384662_2.pdf
（H30.11.11 確認）

(2) 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編」（廣済堂あかつき）

(3) 文部科学省（2010）「生徒指導提要」（教育図書）には、児童生徒の問題行動についてその背景をしっかり把握していくとあるが、行動のコントロールの苦手さの要因には発達障害や被虐待によるもの、家庭での問題、思春期の感情の不安定さなどが挙げられる。

(4) 中央教育審議会（平成 24 年 8 月 28 日）「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」は文部科学省ホームページから見ることができる。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm（H30.11.11 確認）
この中で、これからの教員に求められる資質能力は、

（ⅰ）教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力（使命感や責任感、教育的愛情）

（ⅱ）専門職としての高度な知識・技能・教科や教職に関する高度な専門的知識（グローバル化、情報化、特別支援教育その他の新たな課題に対応できる知識・技能を含む）・新たな学びを展開できる実践的指導力（基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習、協働的学びなどをデザインできる指導力）・ 教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力

（iii）総合的な人間力（豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力）

と示されている。

(5) 道徳教育の 4 つの視点の内容項目 A～D とは次の通りである。A 主として自分自身に関すること（自律、誠実、向上心、勇気、心理の探究など）、B 主として人との関わりに関すること（思いやり、感謝、礼儀、信頼、相互理解など）、C 主として集団や社会との関わりに関すること（国際理解、国と郷土を愛する心、勤労、社会参加など）、D 主として生命や自然、崇高なものとの関わり（生命の尊さ、環境保全、畏敬の念、よりよく生きる喜びなど）

(6) 詳しくは、神戸女子大学文学部紀要第 52 巻「次世代の子供につけるべき力と道徳教育との関連についての考察―教員アンケート調査の分析を通して―」で、教員 223 名のアンケート調査を行った結果と考察について述べているので参照のこと。

(7) 押谷由夫（1995）「総合単元的道徳学習論の提唱」文渓堂

押谷はこの中で、「総合的学習は、課題解決の過程において、子供が多様な道徳的価値を創造し、道徳的実践へと高めていくことで、道徳性の育成を図るものである。」と述べ、子供が身につけた道徳的価値を日常生活で実践していけることが重要だとしている。

本稿は、日本道徳教育学会第 91 回大会（2018.7.1）での研究発表と発表要旨集 pp.132-133（谷山優子「これからの社会を生きる子どもたちにつけたい力と道徳教育」）の内容について加筆修正したものである。